

特集「情報システム論文」の編集にあたって

松澤 芳昭^{1,a)}

近年の情報通信分野では、人工知能やビッグデータ解析など、最新技術の応用による情報システム開発が注目されている。しかし、「組織体の活動に必要な情報の収集・処理・蓄積・配布」という元来の情報システムの役割は変わるところがない。人工知能のような技術の進歩によって、ますます技術と人間活動を調和させる情報システムデザインについての議論が必要になる。「情報システムと社会環境研究会」(IS 研究会)では、情報システムの普及と啓発に寄与すべく、2005 年以来、毎年情報システム論文の特集号を企画し、良質な論文を採録してきた。

本特集号では、これまでの特集号と同様に、情報システムの分析・設計・構築・運用と利用に関する理論と実践、および情報システムと人間・組織・社会との相互関連や、さまざまな組織でのシステム開発から得られた知見や情報ニーズをとらえた新しい情報システムの提案など、広範囲な対象の論文を募集した。

投稿された論文は 10 件となり、当初の予定より少ない件数ではあったが、様々な応用領域における論文が投稿された。採択率は目標の 50% に対し、採録数は 3 件で 30% となり目標を下回ったものの、十分な質の論文を掲載することができたと考えている。

採録された論文は、スマートホーム向け通信システムのミドルウェア設計、教育者支援システムの開発、スポーツ分析支援システムの開発、の 3 件である。いずれも人間や組織活動に配慮されたシステムの議論が展開されており、情報システム特集号としてふさわしい内容の論文を採録できた。

情報システム論文は、対象とする範囲がきわめて広いこともあり、論文としての有効性の評価や正確性を確保するのが難しい。このような課題に対する 1 つの試みとして、IS 研究会では、情報システムの有効性評価手法として、量的評価と質的評価のガイドラインをそれぞれ公開している。本特集号では、質的研究論文の査読にあたり、査読者にこの文書の閲覧を依頼して査読基準の統一を図っている。IS 研究会では、特集号への投稿を促す意図も含め、研究発表会において質疑応答の時間を長めにとったセッションを企

画するなど、投稿論文の質・量の向上に向けて取り組んでいる。

ただ、今回も多くの開発事例論文が投稿されたが、必ずしも適切な量的・質的評価を基にした論文の有効性が記載されていない状況があり、今後も、情報システム論文における量的・質的評価方法について、より身近に学べる仕掛けを検討していきたい。そしてこれらの活動が情報システムの発展に寄与することを期待している。

最後に、本特集号の機会を与えていただいた論文誌編集委員会、短い査読期間の中で丁寧に査読していただいた特集号編集委員、査読者各位、スケジュール管理を含め様々な支援をしていただいた学会担当者の方々に心より感謝いたします。

「情報システム論文」特集号編集委員会

- 編集委員長
松澤芳昭 (青山学院大学)
- 幹事
柿崎淑郎 (東京電機大学)
- 編集委員
阿部昭博 (岩手県立大学)
大場みち子 (公立はこだて未来大学)
兼宗 進 (大阪電気通信大学)
児玉公信 (情報システム総研)
後藤 晶 (多摩大学)
刀川 眞 (室蘭工業大学)
辻 秀一 (NPO 法人 M2M 研究会)
富澤真樹 (前橋工科大学)
畑山満則 (京都大学)
樋地正浩 (日立ソリューションズ東日本)
深田秀実 (小樽商科大学)
本田正美 (東京工業大学)
丸山 広 (青山学院大学)
渡辺博芳 (帝京大学)

¹ 青山学院大学
Aoyama Gakuin University, Kanagawa 252-5258, Japan
^{a)} matsuzawa@si.aoyama.ac.jp